

カルチャー・ショック 日本人のみた外国

マニラでの同居人？

森 早紀恵

三度目の留学先として私が選んだ国はフィリピンだった。既に一年間の留学を二回経験し、ホームステイにも慣れていたらつもりだった。しかし、テレビ、映画でよく知るアメリカやカナダの生活と異なり、フィリピンでの生活は正にカルチャーショックの連続だった。

マニラ到着、息の詰まるような蒸し暑い空気の中、待てども待てども約束の迎えは来ず、不安な気持ちは募るばかり。考えてみればその時から既にフィリピノタイムという文化の違いを身をもって体験していたわけだが、その頃はまだ今後の更なるショックを知る由もなかった。

電話で催促後、無事にホストマザーと合流。早速これからの我が家となる家へ連れて行ってもらう。車は大学内にある民家が立ち並ぶ場所に入った。周りには山羊、犬、鶏が放し飼いされている。「ここだ」と言われて振り向いた先にはトタンでできた屋根のついた青色の倉庫のような建物があった。一瞬息を呑む。「まさかここじゃないでしょう？」心の中で叫ぶ。しかし、私の大きなオレンジ色のスーツケースは家の中から出てきた女性にあつという間に持っていかれてしまった。「これが家なのか？」という外観を見て、今後の生活に最も不安を感じた留学初日の出来事だった。

実際のところ、その内装は想像よりも遙かにきれいで、外観からは想像できないモ

ダンな感じだった。けれども、シャワーの代わりにポリタンクに溜めた水を使うことや、トイレットペーパーが家にないこと、洗濯が手洗いだったことなどのカルチャーショックは数え切れないほどあった。だが、数ヶ月もすると試行錯誤して生活を快適にすることを覚えた。ホストファミリーと同じ生活をしながら、庭になつていいるココナツを食べたり、落ちていいる葉っぱを燃やして夕食のおかずを焼いたりすることや、水シャワーにも少し慣れた。私はすっかりフィリピン色に染まっていた。

しかし、私がどうしても最後まで慣れなかったのはこの家で一〇カ月間を共にしたねずみ達であった。彼らは至る所に穴を掘り、部屋と部屋を往復したり、キッチンで見え隠れしたりしていた。最初は驚いて、彼らを見つけた度に「あ、いた！」と心の中で叫んでいた。食事も衛生的に大丈夫なのか不安に思いながら食べていた。食事中でも彼らはお構いなく穴から出たり入ったりを繰り返している。いくら無視しようとしてもどうしても気になる。

そこで、家中にねずみ取りをしかけた。ある朝など、穴の前にしかけたねずみ取りに七匹もが折り重なっていた。家中を掃除してみたり、穴に詰め物をしてガムテープを貼ったり、殺虫剤のようなものを蒔いたりと色々試した。しかし、いくら掃除してもキッチンは相変わらず彼らのテリト

リーだったし、穴に貼ったガムテープは次の朝見るとまた穴が空いていた。そのうちねずみ取りにもひっかからなくなった。

そんなある時、夜、寝ていたら手に何か感じるものがあった。生暖かい、毛深い感触。私の手の中に収まっている。：：眠気眼で手元を見ると、そこにはねずみが入っていた！ねずみも私に気づいて、一目散に逃げていった。そりゃ、ねずみの方が怖かったに決まっている。だが、私も電気をつけて、半べそをかいていた。目を見張ってねずみの姿を探すが、そういう時に限って出てこない。そのうち諦めて手を洗って寝た。この事件にはとどめを刺された。いくら頑張っても彼らの仲間はずから次に登場したし、そのうち策も尽きた。

こうして結局滞在中の一〇カ月間、ねずみ達には勝てなかった。滞在中は他にも色々な珍事件が起きた。でも、あの家でなければ絶対に味わうことができなかった。ねずみはトラウマになったが、ホストマザーや同居人達と共にねずみに戦いを挑んだ記憶は、今となってはよき笑い話だ。

(もり さきえ／アジア経済研究所
国際交流・研究室)

